協議会 20 年の歩み

全国歯科大学・歯学部附属病院
診療放射線技師連絡協議会
会長　片木　喜代治

当協議会設立の流れは、1987 年 5 月に関東地区の歯科大学や歯学部に勤務する技師の連絡会が発足し、10 月には広島大学での第 28 回日本歯科放射線学会に合わせて全国的な技師連絡会議が開催されました。これを契機に 1989 年の日本歯科放射線学会時には、全国歯科放射線技師連絡協議会設立総会を開催し、会長に日本大学の西岡敏雄氏を選出しております。翌年の 1990 年 7 月には、第 1 回全国歯科大学・歯学部附属病院診療放射線技師連絡協議会として総会および歯科放射線技術研修会を東京医科歯科大学の担当で開催し、2009 年 6 月には、新潟大学で第 20 回の総会および研修会を迎えることができました。

この 20 年間の口腔領域の画像検査を振り返ってみますと、口内法およびパノラマ撮影が主流のアナログ時代から全身用 CT・MRI・US そして歯科用 CT など新しい検査機器の登場を含めデジタル時代に進んでまいりました。これらに対応するため協議会は、新しい検査技術の修得やデジタル化に伴う画像処理技術の情報交換の場として重要な役割を果たしてきたと考えております。特に、歯科放射線技術研修会では、デジタル化に関する現場での問題点を中心にフリー討論を企画し、その内容を年 2 回発行の会誌に掲載し各施設で情報が共有できるようにしております。また、協議会では会員にメールアドレスを公開して頂き、いつでも会員同士が新しい情報や各施設でのデジタル化の問題点などを迅速に知ることができる会員メールシステム（JORT）を構築し運用しております。

学術面では、小冊子「Q&A 歯科放射線被ばくと防護」の作成、ポスターの作製、「歯・顎顔面検査法」の出版や日本放射線技術学会雑誌へ「口腔・顎顔面領域の検査と疾患」をテーマに連載を行うなどの実績を残しております。

その他、歯科界の現状に目をむけますと、むし歯の激減による疾病構造の変化に伴い診療内容も新しいシステムへの変換（パラダイム・シフト）が求められ、また患者様の少子高齢化、歯科の医療費抑制なども大きな問題となっております。

教育機関である国公私立大学の改革では、医学部と歯学部の統合に伴い医療職部門の一元化や歯科医師数や入学定員の削減などの指導により厳しい状況におかれております。

このような状況の中、協議会の 20 周年の記念事業としてホームページに「協議会 20 年の歩み」を掲載いたしました。今後も引き続き皆様の支援を賜り、医育機関病院スタッフの一員として資質の向上と歯科医療技術の発展に貢献したいと考えております。　　2010 年 5 月 30 日